論文タイトル[paper title]

サブタイトルは任意[paper subtitle]

第一著者名, 所属, 企業, 国, 電子メールアドレス[Author]

第二著者名, 所属, 企業, 国, 電子メールアドレス[Author]

*アブストラクト*—このドキュメントはそれ自体がテンプレートとなり、論文の構成要素をそのスタイルも含めて定義している。WORD機能のスタイルウィンドウにおいてpaper title、Author、abstract、本文、見出しなどのスタイルを選ぶことができる。本テンプレートではスタイルは[ ]で囲み、 [style]のように示す。タイトルやアブストラクトでは記号や特殊文字などは使用できない。[Abstract]

キーワード — 論文; テンプレート; フォーマット;スタイルシート[key words]

#  はじめに[見出し 1]

このテンプレートはMS Wordで編集が可能なdocxファイルとしてセーブされており、論文著者がショートペーパーを準備する際のフォーマットに関する必須情報を提供しようとするものである。論文に求められる要素が標準化されており、これにより(1)個々の論文をフォーマット化する際に簡便になり、(2)論文を電子的に作成する際の要件を満たし、(3)カンファレンスのプロシーディングスとしてのスタイルの一貫性につながる。なお論文をとおして、日本語の「です、ます」ではなく「だ、である」を使用する。[本文]

マージン、行間、書体などは定義されているが、多階層や数式、図形、表の構成要素などは定義されていない。定義されていない構成要素については、下記に示す基準を参考に、執筆者に作成が委ねられている。[本文]

# テンプレートの使用[見出し 1]

## まずは本テンプレートを使用する [見出し 2]

このテンプレートは日本国内で一般的に広く採用されているA4サイズである。 [本文]

## スタイル仕様を維持する

本テンプレートでは、論文のフォーマットとテキストのスタイルを定めている。マージン、列幅、行間、文字フォントなどが規定されており、執筆者にはこのスタイル仕様を維持し、変更しないことが求められる。執筆する論文は単に独立した文書ではなく、カンファレンスのプロシーディング全体の一部であることを想定しているため、現在の表記スタイルを変更しないよう注意が必要である。

# スタイルより先に論文の準備を

このテンプレートを使って論文のスタイル設定を始める前に、まずは別ファイルにテキストで論文内容を記述し、保存することを推奨する。テキストファイルと画像ファイルは、スタイルが決まるまでは別々に保管しておくと良いだろう。改行は段落の最後に一回だけ使用し、テキストの見出し番号やページ設定をせずに、論文の内容に注力する。

最後にフォーマットする前に、論文の内容と構成を完成させる。表記方法や校正に関する詳細について、以下に示す。

## 略語や頭字語について

略語や頭字語（例：UVM = Universal Verification Methodology）は、それが本文で最初に使われた時に定義する。ただしIEEE、単位系などについては不要である。略語や頭字語は止むを得ない場合をのぞき、タイトルやアブストラクトでは使用しない。止むを得ずアブストラクトで使用する場合には、アブストラクトで定義した上に、さらに本文でも最初に使われた時に定義する。

## 単位について

* 単位は国際的な標準、すなわちSI単位系（MKS）またはCGSを使用する。（SI – MKSを推奨する。）
* SI単位系とCGS単位系を混在させることは避けるべきである。例えば電流でアンペアを使用し、磁場でエルステッドを使用するなど、単位系を混在させることは誤解を生じさせかねない。もし混在させなくてはならない場合は、数値を使用する数式においても単位を明確化することが必要である。
* 単位についての記号と読みの文字表記を混在させることは避けるべきである。例えば「カバレッジ95%」と「カバレッジ95パーセント」を混在させずに、どちらかに統一する。
* 小数点の直前のゼロは省略せずに明記する。例えば「.25」ではなく「0.25」のように記載する。

## 式について

式は本テンプレートでは規定していない。式はTimes New RomanかSymbolのどちらかのフォントを使用する。多階調の式を作成する場合には図形として扱い、論文のスタイルが決まった後に本文に挿入する。数式を追加するには、MS Wordにビルトインされた数式エディタを使用すると良い。

式には連続した番号をつける。式番号は(1)のように丸括弧を使用し、右寄せに配置する。MS Wordには、文書の右端と同じ位置に自動挿入する方法がないため、下記のように非表示の3段組の表を用い，その2段目に式を文字列中央揃えで， 3段目に式番号を右揃えで配置する。方程式をよりコンパクトにするために、スラッシュ（ / ）やexp関数、または適切な指数を使用することもできる。数値や変数にはイタリック体のローマ字を使用し、ギリシャ語の記号は使わない。マイナス記号はハイフンではなく、長いダッシュを使用する。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | $$A=πr^{2}$$ | (1) |

式中で使用する記号は、式の前または直後に定義する。また文頭以外では、式(1)やEq. (1)などではなく、 (1)のみで参照する。

# テンプレートを使って論文を完成させる

別ファイルでのテキスト編集が終了したら、本テンプレートを使う準備が完了したことになる。念の為テンプレートは残しておき、「名前をつけて保存...」によりカンファレンスで分かりやすい名称でセーブする。そしてテキストファイルをインポートするか、コピー＆ペーストにより、本テンプレートに挿入する。MS Wordのスタイルウィンドウなどを使って規定のスタイルに合わせる。

## 著者と所属について

複数の著者の所属や企業が同じである場合は、著者ごとに所属や企業を繰り返し記載しない。所属はできるだけ簡潔にするよう配慮する。

## 見出しについて

見出しは、読者が論文を読み進める上でガイドとなる重要なものである。見出しには構成見出しと、テキスト見出しの２種類がある。

構成見出しは、論文を構成する異なる構成要素を特定するもので、他とのトピック的な従属関係がなく独立している。例えば「参考文献」、「謝辞」のように、独立した異なる構成要素になる。この構成見出しのスタイルとしては[見出し5]を使用する。構成見出しでもアブストラクトなどはイタリック体を使用する。それぞれに準備されているスタイルから選択して適用する。

一方でテキスト見出しは、トピックを関連性や階層的な関連に基づいて構造化するものである。例えば冒頭の論文タイトルは最上位のテキスト見出しであり、その後のすべての内容がこの1つのトピックに関連し、それを詳細化して説明することになる。サブトピックが2つ以上ある場合は、次のレベルの見出しを使用する。逆にサブトピックが2つ以上ない場合は、見出しを使うべきではない。タイトルに次ぐレベルは大文字のローマ数字が振られる「見出し1」を、次のレベルでは大文字の英文字が振られる「見出し2」を使用する。

## 図表について

図表の位置は、可能であればページの先頭か末尾に配置する。図のキャプションは図の下に配置し、表のキャプションは表の上に配置する。表の脚注がある場合は表の下に配置する。図や表の配置は、本文中で引用した後に挿入する。引用は本文中であっても文頭であっても表1、図1のように記載し参照する。

表I. Table styles [図表番号+段落前]

| Table Head | Table Column Head [table col head] |
| --- | --- |
| Table column subhead | Subhead | Subhead |
| copy | More table copy [table copy] | copya | copy2 |
| copy | More table copy [table copy] | copy | copy3 |

1. 表の脚注 - フットノート例 [table footnote]

図と表のキャプションは8ポイントのTimes New Romanのフォントを使用する。図中の軸のラベルには読み手の誤解を避けるために記号や略語ではなく、言葉を使う。例えば磁化を表すMagnetizationであれば単に"M "とするのではなく、"Magnetization"、または "Magnetization, M "と記述する。ラベルに単位を含む場合は括弧内に表示する。また軸にのみ単位を付けない。例えば"A/m "のみを記載するのではなく、"磁化（A/m）"と記載する。量と単位の間をスラッシュで区切るラベル付けもしてはならない。例えば、"温度（K）"と書き、"温度/K "とは書かない。

「横書きテキストボックスの描画」による高画質またはベクター形式のグラフィックスの挿入を推奨する。ベクター形式のグラフィックスを取込むには、Enhanced Window Metafile (EMF) を使用する。

MS MordではScalable Vector Graphics (SVG)がサポートされていないためInkscapeなどによりSVGからEMFに変換する手段もある。フレーム枠を隠すにはテキストボックスを選択し、図形の書式設定から「線なし」を指定する。

図 2. キャプションの配置例 [図表番号]

##### 謝辞 [見出し5]

謝辞は必須ではないが、論文作成において支援、協力、アドバイスなどを受けた人や団体に対する謝辞は推奨される。謝辞の構成見出しのスタイルには[見出し5]を使用する。

##### 参考文献 [見出し5]

本テンプレートでは[references]スタイルにより参考文献に対して連続する番号を[1]、[2]のように付与する。文中で引用する場合は単に[3]のようにブラケットのみを使用する。例外として文頭で引用する場合には参考文献[3]のように記載しても良い。

参考文献の著者が6人以上でない限り、”et al.”を使用せず著者の名前をすべて記載する。未発表論文は，たとえ投稿されていても "unpublished "と表記する [4]。出版が決まった論文は "in press "と表記する[6]。論文タイトルの最初の単語の先頭文字のみを大文字にするが、固有名詞や元素記号などはこの例外である。

翻訳書籍に掲載された論文については、まず英語文献の引用を行い、その後にオリジナルの外国語の引用を行う [6]。

1. G. Eason, B. Noble, and I.N. Sneddon, “On certain integrals of Lipschitz-Hankel type involving products of Bessel functions,” Phil. Trans. Roy. Soc. London, vol. A247, pp. 529-551, April 1955. [references]
2. J. Clerk Maxwell, A Treatise on Electricity and Magnetism, 3rd ed., vol. 2. Oxford: Clarendon, 1892, pp.68-73.
3. I.S. Jacobs and C.P. Bean, “Fine particles, thin films and exchange anisotropy,” in Magnetism, vol. III, G.T. Rado and H. Suhl, Eds. New York: Academic, 1963, pp. 271-350.
4. K. Elissa, “Title of paper if known,” unpublished.
5. R. Nicole, “Title of paper with only first word capitalized,” J. Name Stand. Abbrev., in press.
6. Y. Yorozu, M. Hirano, K. Oka, and Y. Tagawa, “Electron spectroscopy studies on magneto-optical media and plastic substrate interface,” IEEE Transl. J. Magn. Japan, vol. 2, pp. 740-741, August 1987 [Digests 9th Annual Conf. Magnetics Japan, p. 301, 1982].
7. M. Young, The Technical Writer’s Handbook. Mill Valley, CA: University Science, 1989.

このテンプレートはDVCon Japan 2024用に用意されたものである。